

戦時下の暮らし(その4)

献金・献納

戦争は、多くの犠牲と多額の費用、そして膨大な物資(兵器も含む)の消耗が伴います。

これらすべてを国の予算で賄うことは極めて困難であり、国はこれを補うために国民に積極的な(なかば強制的ともいえる)善意を期待したのが献金・献納、それに貯蓄と国債(戦争に使う予算確保のため)の消化でした。「戦時下の暮らし(その1)」で記しましたが、戦争への強力を求める「国民精神総動員運動」の主要な運動項目に「国債応募奨励」「貯蓄奨励」「国防資源の献納」とあり、この運動の推進母体である銃後援会が中心になり運動が進められました。

献金・献納の窓口は軍関係機関をはじめ国や地方行政機関などに置かれ、端野村では役場が窓口になっていました。

しかし、これに関する書類や記録がなく詳細については不明ですが、「昭和一三年端野村事務報告書」や「昭和一八年端野村事務報告書」に次のように記されており、毎年相当額の献金があったことがうかがえます。

「昭和一三年端野村事務報告書」

(2) 現下ノ時局ニ鑑ミ銃後国民ノ士気愈々旺盛ニシテ是方成績洵ニ見ルベキモノアリ村民ノ熱意ト発露トシテ国防並ニ献金ノ申出続出シアルハ洵ニ喜ブベキ現象ナリ、本年中ニ取扱ヒタル献金額九百貳拾六円七拾八銭ナリ

「昭和一八年端野村事務報告書」

献金 戦争壮烈ナルニ伴ヒ村民ノ愛国赤誠ハ燃上リ献金スルモノ続出、昨年中二八一九件、一九二四円六三銭四厘ノ多額に達シタリ

残念ながら、貯蓄奨励と国債消化に関しては、端野村事務報告書にも記載がなく不明ですが、相当額の預金と国債購入があったと思われます。

なお、戦後の昭和二十一年(一九四六)二月、異常なインフレの抑制と経済再建のため「金融緊急措置令」が施工され、「預金の封鎖」と「新円への切替と発行」が行われ、一定額以上の預金は封鎖され、国債は新円の発行により、その価値が低落し、預金、国債はともに紙くず同様になったと言われました。

飛行機の献納

昭和一四年(一九三九)四月、「零戦(零式艦上戦闘機)」が誕生し、輝かしい戦果をあげ、飛行機に対する国民の関心が高まりました。

この関心の高まりが献金献納運動に連動し、飛行機の献納運動が全国的に展開されました。端野村にあっても、昭和一九年六月「端野号」二機を献納しました。

その詳細は不明ですが「緋牛内国民学校日誌」に次のように記されており
昭和一九年六月二十七日端野号献納式。学校長美幌二出張。本村民誠二機献納トナル。他町村モ会シ今般一八機ナリ

この日、村長ほか区長、学校長などが出席し端野号二機を献納したものと想われます。しかし、どれだけの献金額をもって一機に換算したかは不詳ですが、飛行機献金について、「緋牛内国民学校日誌」に次のように、記されていることから全村民こぞつての運動に取り組んだものと思われます。

昭和一九年九月三〇日 飛行機献金送付ス
一一月二二日 飛行機青年一人二〇銭、児童一人一〇銭以上献金額六三円二四銭



▲航空機端野村号(報国第3631号、艦上戦闘機)

昭和一九年六月二十七日美幌海軍航空隊において、二機献納

金属回収

戦時中、鉄類・絹類・毛布や野草に至るまで軍需品として供出を求められました。

その目的は、航空機・軍艦・大砲・銃機・弾丸・被服・燃料など、兵器や軍用機材にしようとするためでした。

端野村での金属回収運動は、国民精神総動員運動として、銃後援会活動の中で取り組まれました。

金属回収で集まった主な物品は、鉄瓶・やかん・火鉢・五徳・鍋・釜などの鉄類、弁当箱などのアルミ製品、合金や銅製品など様々で、中には金・銀製品といった高価品を供出する人もいました。

新川橋の欄干も

公共施設や物件も不要不急なもの優先して回収しましたが、現に使用されている新川橋（端野大橋の前身）の欄干も、昭和二〇年（一九四五）六月頃溶接で切り取り供出されました。（二区在住三村弘次氏談）

そのため、橋から転落し負傷する人もいたと言われています。

戦後一区の方々がその対策として針金やはさぎなどで要所に危険防止を施し、安全な欄干の設置を当局に要望し、昭和三〇年頃、ようやく木製の欄干が取り付けられました。

梵鐘・仏具も

昭和一七年五月、政府が金属回収令を期日指定公布し、寺院の仏具・梵鐘等に強制譲渡令を発動した事から無量寿寺の梵鐘も供出され、これと共に檀家の仏具も供出されました。



▲二区の金属回収

資源回収

毛皮は満州や中国北部の酷寒地帯や航空作戦による航空士の被服材料として欠くことができない資源でした。そのため、端野村にあつては、「うさぎ」「めん羊」「犬」などの皮が回収されました。

また、綿や羊毛も兵士の防寒被服等の原料として用いられ、端野村では綿布・羊毛等が回収されました。

さらに、航空機、艦艇用の燃料として「松葉油の採集」を、端野村忠志地区内の国有林で、村内の国民学校高等科の生徒と北見中学校の生徒・村内の青年学校の生徒等を動員し行われました。



▲「航空燃料 松葉油採油所跡」平成4年撮影

緋牛内小学校沿革史によれば昭和二〇年五月二四日から作業を開始したようである。協和部落三〇年史によれば3月中旬から釜の設置や宿舎などを造ったと云う。

この松葉油の採集は、とど松を切り倒し枝葉とむいた皮を集め、ハツカ釜で蒸すとハツカ油ほどの量が取れましたが、採集された量も、その処理がどうなっていたかも定かではありませんが、後年になり関係した方の話では、ドラム缶二、三本で、農業会を通し農會本部に送ったという事でした。

その他軍馬の飼料として「野草」の収集なども行われ、戦時下の村民の暮らしは戦争に振り回された日々であったと言えます。